（1）　ウ　メ　　〔果樹類＞落葉果樹＞核果類＞小粒核果類＞うめ〕

① 防除のポイント・注意事項

病害虫名	防除時期	摘　要
黒　星　病	生　育　期（開花終了～５月）	・果実への感染から発病までの潜伏期間は30日以上ある。 ・4月中旬～5月上旬の天候が低温多雨になると発生が多くなる可能性がある。 ・風通しや日照の悪い園で多発する。多発園では散布間隔を10日以内にする。
	収　穫　後（８～９月）	・翌年の発生源になる枝病斑を減らすとともに、花枝生産をする場合はその品質向上をはかるため、収穫後から9月末までに薬剤を散布する。
かいよう病	葉芽発芽前まで（休眠期）	・常発地では休眠期防除が不可欠だが、強風を受けやすい園では防風垣や防風ネットによる防風対策が必須である。
	果実肥大期（4月上旬～５月上旬）	・強風や降雹等で傷害を受けた場合は、治療効果のある抗生物質剤を速やかに散布する。 ・かいよう病の防除対策は欄外参照。
灰色かび病	生　育　期（開花終了直後～4月中旬）	・開花後のガクや雄しべで発病が始まり、幼果では多くの場合、果梗周辺にやや窪んだ病斑を生じる。好適な条件が揃うと、果実全体が菌糸で覆われ落果する。 ・開花盛期から開花終期までの日数が10日以上に長引くと発生が多くなる傾向にある。
すす斑病	生　育　期（5月下旬～6月上旬）	・5、6月に雨の多い年や収穫期が遅い谷あいの園で多発しやすい。 ・ネット収穫を行う場合は、収穫開始時期を考慮して最終薬剤散布の時期を調整する。
環紋葉枯病 葉炭疽病	収　穫　後（７～８月）	・発生前の予防散布または発生初期に薬剤散布を行う。
切り口および傷口のゆ合促進	剪定整枝時、病患部削り取り直後、及び病枝切除後	・切り口にトップジンMペーストを適量塗布する。
アブラムシ類	生　育　期（４月～５月中旬）	・幼木や窒素過多で生育旺盛な樹に発生が多い。 ・展葉期から5月に高温、乾燥が続くと多発しやすい。 ・展葉直後の新梢や幼果に寄生して吸汁する。新梢に寄生すると葉は萎縮する。
ノコメトガリキリガ（モモノハナムシ）	開花終了直後～幼果期	・花蕾および幼果に貫入・食害する。
コスカシバ	休　眠　期（落葉後～萌芽前）	・この時期にガットキラー乳剤を用いる場合、樹幹部および主枝に十分散布する。新芽の薬害を避けるため、萌芽前に散布を終える。
	幼虫発生期（5月～10月）	・生物農薬を用いる場合は、効果を高めるため晴天時の散布は避け、曇天または少雨時に散布するのが望ましい。 ・虫糞が見られるところを中心に主幹部全体に散布する。
	成虫発生期（5月上中旬）	・この時期は成虫の交尾阻害により密度低下をはかる性フェロモン剤を用いる。 ・ディスペンサーを枝に巻き付け固定する。効果は1シーズン限りなので毎年付け替える。 ・効果を高めるために、広範囲一斉設置と併せて防風垣の設置を行う。
ケムシ類	幼虫発生期	・ウメを食害するケムシ類としては、春季に発生するマイマイガ、オビカレハ、夏秋季に発生するモンクロシャチホコ等がある。
	［耕種的防除］	・せん定時に越冬卵塊を取り除く。 ・卵は1か所に固めて産み付けられ、若齢幼虫のうちは狭い範囲に群がる性質がある。分散前の若齢幼虫のうちに発見し、捕殺する。
ハマキムシ類 アメリカシロヒトリ	収　穫　後（８～９月）	・害虫の早期発見に努める。

病害虫名	防除時期	摘　要
カイガラムシ類 カイガラムシ類幼虫 ウメシロカイガラムシ	第1世代発生期（４月下旬～5月中旬） 第2世代発生期（7月中下旬） 第3世代発生期（８月下旬～9月上旬）	・ウメシロカイガラムシ、タマカタカイガラムシの防除対策は欄外参照。 ・成虫のカイガラをめくって、産卵～幼虫ふ化時期を把握し、発生初期に散布する。 ・ウメシロカイガラムシは幼虫発生初期および7～10日後の2回防除すると効果が高い。 ・休眠期防除参照。
ケシキスイ類 アカマダラケシキスイ	収　穫　前	・ウメ果実を食害するのはアカマダラケシキスイであり、落果後、数時間で幼虫が果実へ侵入し始める。 ・成虫は5月中旬～秋まで発生し、幼虫は6月上旬～8月上旬まで発生する。
	［耕種的防除］	・園内に落ちている梅が増殖源となるため、早急に園外へ撤去する。 ・落下果実をなるべく地面に接触させないよう、ネット収穫では朝夕2回以上こまめに果実の回収を行う。

② かいよう病の防除

本病は、果実に病斑を作り商品価値を低下させるだけでなく、開花期に花梗付近に感染したものは後に黒変して、落花（落果）につながることが多い。また、感染した枝は、病斑部分で亀裂を生じたり、折れたりすることがある。しかし、本病に対して卓越した効果のある防除体系は確立されていないので、次の各項目により総合的な対応を行う。

・防風垣・防風ネットの設置

風雨によってできた傷口が主な感染経路となるので、樹園地の周囲に防風垣や防風ネットを整備して、風当たりを和らげることが薬剤散布よりも重要である。なお、防風対策は、ミツバチなどの訪花昆虫の活動にも良い影響をもたらす。

・抗生物質薬剤の散布

暴風雨や降雹があった場合、天候回復後すみやかに散布する。また、常発園では4月中旬に散布すると発生抑制効果が高い。

・ボルドー剤の散布

防風対策が不十分な場合、果実肥大期の薬剤散布だけでは、十分な効果が認められない事例が多い。葉芽発芽までのボルドー剤散布によって、かいよう病の越冬菌密度を低下させることができ、果実肥大期に散布する薬剤の効果を高めることができる。

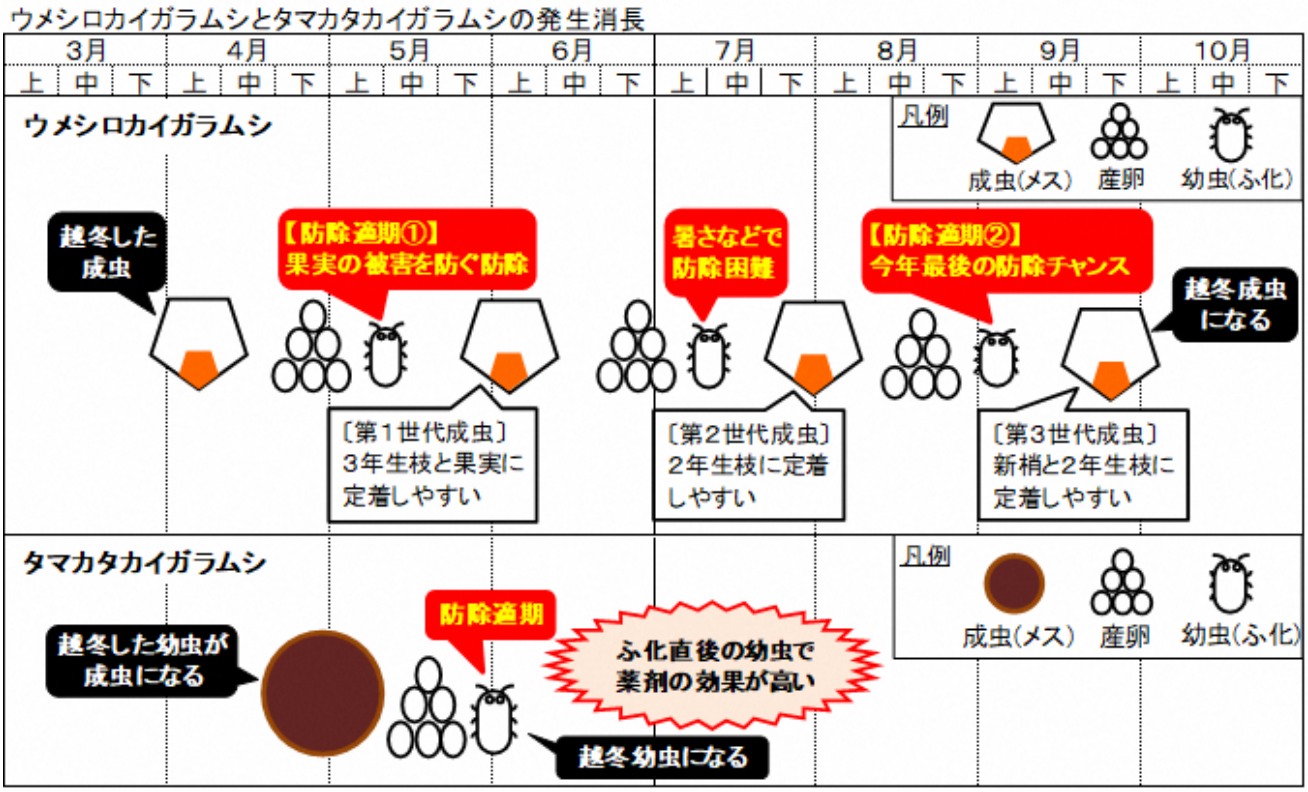
③ カイガラムシ類の防除

ウメシロカイガラムシ

・年３回発生し、５月上旬に発生する第１世代が果実にも加害する（次頁図）。
・多数の幼虫や成虫が集団でウメ樹に寄生するため、樹勢の低下やこうやく病の発生原因になる。
・ふ化から２週間程度でカイガラを形成するため、ふ化直後に薬剤散布しないと防除効果が著しく低下する。
・薬剤の効果を得るためには、雌成虫のカイガラをめくって産卵時期を把握しながら、ふ化時期を正しく判断し、ふ化最盛期に適切な薬剤を用いて防除を行う。

タマカタカイガラムシ

・幼虫と雌成虫が寄生して、吸汁加害する。多発すると落葉が早まったり、枝が枯死する恐れがある。
・年１回発生する。２齢幼虫で越冬し、５月下旬～６月上旬にふ化する（次頁図）。
・もっとも有効な防除時期はふ化直後の５月末頃であり、日陰部を好んで定着するため、樹の下から吹き上げて薬剤を散布すると効果が安定する（平成29年度実用化技術）。



④ モモヒメヨコバイの生態と防除

本県でのモモヒメヨコバイの発生は、令和６年に初めて確認（同定）された。成虫は、体長3～3.5㎜で、体色は黄緑色から緑色。幼虫は若齢の時は薄い黄色で、老齢になるにつれて濃くなり、成虫と同じ緑色になる。複眼は黒く、頭頂部に特徴的な黒点がある。詳しい生態は明らかにされていないが、成虫で越冬する可能性があり、１年に複数の世代が発生すると考えられる。

幼虫・成虫が葉を吸汁することで加害し、葉がかすり状に白く脱色し、やがて黄化する。被害量が多いと早期落葉し、翌年の樹勢、収量への影響があると考えられる。被害葉の裏側には、幼虫の白い脱皮殻が付着していることが多い。

国内ではウメ、モモ、ハナモモ等のバラ科の果樹や花木への加害が確認されており、海外ではナシ、リンゴ、ポポー等への加害も報告されている。

春先から圃場内をよく見回り、発生、被害の早期発見に努める。防除の際には、必ず登録のある薬剤を散布する。通常の薬剤防除を行っている生産園地では、本種による大きな被害は確認されていないが、放棄園など管理不足の園地では急速な増殖が見られることから、地域で連携した防除対策が重要である。

⑤ スプリンクラー防除

薬剤散布の作業を省力化できるが、薬液量は手散布の約２倍必要になる。また、枝葉が繁茂した状態では枝幹への薬液の付着が劣るため、カイガラムシ等の枝幹害虫に対する防除や５月中旬以降のすす斑病防除は、従来どおり手散布で行う必要がある。

ウメ【殺菌剤・その他】

RPA

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）								
									かいよう病	すす斑病	すす斑病（うめ）	灰色かび病	環紋葉枯病	黒星病	切り口及び傷口のゆ合促進	葉炭疽病	銅水和剤による薬害の軽減
うめ	ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ66D	銅水和剤	M1		葉芽発芽前まで	-	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	50倍								
うめ	Zﾎﾞﾙﾄﾞｰ	銅水和剤	M1		葉芽発芽前まで	-	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	500倍								
うめ	ｲｵｳﾌﾛｱﾌﾞﾙ	水和硫黄剤	"UN(I*)		発病前～発病初期	-	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布						500倍			
うめ	ｲﾝﾀﾞｰﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾌｪﾝﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ水和剤	3		収穫前日まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		5000倍				5000倍			
うめ	ｵﾙﾌｨﾝﾌﾞﾗｽﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ・ﾌﾙｵﾋﾟﾗﾑ水和剤	"「-」(I*),3		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布						3000倍			
うめ	ｶｽﾐﾝ液剤	ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ液剤	24		収穫30日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	500倍								
うめ	ｻﾙﾌｧｰｿﾞﾙ	水和硫黄剤	"UN(I*)		発病前～発病初期	-		散布						500倍			
うめ	ｽｺｱ顆粒水和剤	ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ水和剤	3		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～3000倍				2000～3000倍			
うめ	ｽﾄﾛﾋﾞｰﾄﾞﾗｲﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ水和剤	11		収穫7日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～3000倍		2000倍	2000倍	2000～3000倍			
うめ	ﾃﾞﾗﾝﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｼﾞﾁｱﾉﾝ水和剤	M9	劇	収穫14日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		1500～2000倍				1500～2000倍			
うめ	ﾅﾘｱWDG	ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ・ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ水和剤	11,7		収穫7日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000倍			2000倍	2000倍			
うめ	ﾊﾞﾘﾀﾞｼﾝ液剤5	ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ液剤	U18		収穫7日前まで	4回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	500倍								
うめ	ﾍﾞﾙｸｰﾄﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩水和剤	M7		収穫30日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000倍		2000倍		2000倍			
うめ	ﾍﾞﾙｸｰﾄ水和剤									2000倍		2000倍	2000倍	2000倍			
うめ	ﾎﾟﾘﾍﾞﾘﾝ水和剤	ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝ酢酸塩・ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ水和剤	"「-」(I*),M7		収穫30日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布				1000倍		1000倍			
うめ	ﾏｲｺｼｰﾙﾄﾞ	ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ水和剤	41		収穫21日前まで	4回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	1500倍								
うめ	ﾛﾌﾞﾗｰﾙ水和剤	ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ水和剤	2		収穫45日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布				1000～1500倍	1000～1500倍				
小粒核果類	ｵｰｿｻｲﾄﾞ水和剤80	ｷｬﾌﾟﾀﾝ水和剤	M4		収穫21日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		800倍				800～1000倍			
小粒核果類	ｶﾅﾒﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ水和剤	7	劇	収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布			4000倍			4000倍			
小粒核果類	ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝMﾍﾟｰｽﾄ	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙﾍﾟｰｽﾄ剤	1		【A】	3回以内		塗布							原液		
小粒核果類	ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM水和剤	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		収穫21日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布					1000～1500倍	1000～1500倍		1000～1500倍	
小粒核果類	ﾈｸｽﾀｰﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ水和剤	7		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布						1500倍			
小粒核果類	ﾊﾟﾚｰﾄﾞ15ﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ水和剤	7		収穫前日まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布			2000倍	2000～3000倍		2000～3000倍			
小粒核果類	ﾌﾙｰﾂｾｲﾊﾞｰ	ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ水和剤	7		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布						1500～2000倍			
小粒核果類	ﾏｽﾀﾋﾟｰｽ水和剤	ｼｭｰﾄﾞﾓﾅｽ ﾛﾃﾞｼｱ水和剤	「-（生）」		収穫前日まで	-	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	1000～2000倍								
小粒核果類	ﾐｷﾞﾜ20ﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ水和剤	52		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布						2000倍			
小粒核果類(すももを除く)	ｽﾀｰﾅ水和剤	ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸水和剤	31		収穫7日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	1000倍								
小粒核果類(すももを除く)	ﾑｯｼｭﾎﾞﾙﾄﾞｰDF	銅水和剤	M1		葉芽発芽前まで	-	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	500倍								
うめ	ｸﾚﾌﾉﾝ	炭酸ｶﾙｼｳﾑ水和剤	-			-		【Z】									200倍

使用時期：【A】剪定整枝時、病患部削り取り直後、及び病枝切除後

使用方法：【Z】銅水和剤に混用して散布

ウメ【殺虫剤・その他】

RPA

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）										
									ｱｶﾏﾀﾞﾗｹｼｷｽｲ	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	ｱﾒﾘｶｼﾛﾋﾄﾘ	ｳﾒｼﾛｶｲｶﾞﾗﾑｼ	ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類	ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類幼虫	ｹｼｷｽｲ類	ｹﾑｼ類	ｺｽｶｼﾊﾞ	ﾉｺﾒﾄｶﾞﾘｷﾘｶﾞ	ﾊﾏｷﾑｼ類
うめ	ｱｸﾀﾗ顆粒水溶剤	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ水溶剤	4A		収穫7日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～3000倍									
うめ	ｱﾃﾞｨｵﾝ乳剤	ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ乳剤	3A		収穫前日まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		3000倍									
うめ	ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	16		収穫7日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布						1000倍					
	ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ水和剤				収穫後～落葉前									1000倍					
うめ	ｶﾞｯﾄｷﾗｰ乳剤	MEP乳剤	1B		休眠期(落葉後～萌芽前)	2回以内		【Z】									100倍		
	ｽﾐﾁｵﾝ乳剤				収穫14日前まで		200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		1000～2000倍	1000倍								1000倍
うめ	ﾀﾞﾝﾄﾂ水溶剤	ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ水溶剤	4A		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～4000倍					2000倍	2000～4000倍			
うめ	ﾊﾞﾘｱｰﾄﾞ顆粒水和剤	ﾁｱｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ水和剤	4A	劇	収穫前日まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布	4000倍	2000～4000倍									
うめ	ﾌｪﾆｯｸｽﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ水和剤	28		開花期まで	1回	5～200ﾘｯﾄﾙ/10a	【Z】									200倍		
					収穫前日まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布								4000倍	4000倍		
うめ	ﾏﾌﾞﾘｯｸ水和剤20	ﾌﾙﾊﾞﾘﾈｰﾄ水和剤	3A	劇	収穫21日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		4000倍						4000倍			
うめ	ﾓｽﾋﾟﾗﾝ顆粒水溶剤	ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤	4A	劇	収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～6000倍			2000倍		2000倍			2000倍	
小粒核果類	ｱﾙﾊﾞﾘﾝ顆粒水溶剤	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水溶剤	4A		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000倍									
小粒核果類	ｳﾗﾗDF	ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ水和剤	29		収穫7日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～4000倍									
小粒核果類	ｺﾃﾂﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ水和剤	13	劇	収穫前日まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布				2000倍							
小粒核果類	ｺﾙﾄ顆粒水和剤	ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ水和剤	9B		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000～4000倍			2000倍						
小粒核果類	ｽﾀｰｸﾙ顆粒水溶剤	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水溶剤	4A		収穫前日まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000倍									
小粒核果類	ﾓﾍﾞﾝﾄﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ水和剤	23		収穫7日前まで	3回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		2000倍			2000倍						
小粒核果類(すももを除く)	ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ水和剤34	ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ水和剤	1B	劇	収穫21日前まで	2回以内	200～700ﾘｯﾄﾙ/10a	散布		1000～1500倍	1000～1500倍								1000～1500倍
果樹類	ﾊﾞｲｵｾｰﾌ	ｽﾀｲﾅｰﾈﾏ ｶｰﾎﾟｶﾌﾟｻｴ剤	「-（生）」		幼虫発生期	-	25ﾘｯﾄﾙ	【Y】										2500万頭（約10g）	
果樹類	ｽｶｼﾊﾞｺﾝL	ｼﾅﾝｾﾙｱ剤			成虫発生初期から終期			【X】									8g/100本製剤		

使用方法：【Z】樹幹部及び主枝に散布、【Y】虫糞が見られる所を中心に主幹部全体に散布、【X】ディスペンサーを対象作物の枝に巻き付け設置する